広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第52号　2003　297－303

素人の性格認知の発達

林　智幸

(2003年9月30日受理)

Development of naive personality perception

Tomoyuki Hayashi

Lay persons usually understand that the personality has consistency and causality. They also have the knowledge of what contents the personality consists of. Research of "theories of mind," which focuses on the developmental processes of the naive understanding of mind, suggests three stages: (a) alignment of actions (imitation) fosters the foundation of social cognition in young children (i.e., understanding that the mind causes behaviors, grasping the identity of a person, and discovering others' intentionality); (b) understanding of emotions helps young children learn causality and evaluative dimensions of behaviors; and (c) older children and adults understand the consistency of personality and the evaluative dimensions of personality based on Big Five.

Key words: child's personality perception, theories of mind, development
キーワード：子どもの性格認知，心の理論，発達

日常場面における性格認知

「性格とはどのようなものか」という質問をされた心理学者は，Allport の「性格とは，環境への彼特有の適応を決定するような個人内部における精神物理学的体系の力動的機構である」の定義を挙げるかもしれない。では定義を知らない心理学者以外の素人はこの質問には答えられないのだろうか。佐藤・渡邉 (1990) は心理学を勉強していない看護学校生に同様の質問をして，回答の自由記述文を調べた。回答の上位5項目は「十人十色なもの」「その人の個性」「環境などで左右される人生の試練の結果」「人それぞれの特徴」「生まれ育った環境によって全く違うもの」であった。それぞれの回答は Allport の定義の特定の側面のみに注目したものであり，性格心理学的な回答としては不十分である。しかし性格というものが心理学だけではなく，日常に浸透している概念であることをこの研究は示唆している。

本稿は，素人の性格認知の発達に焦点を当てている。性格に対する研究アプローチとしては，性格を科学的に把握する立場と，素人が性格をどのように把握するかを調べる立場の2つに大別できる。後者の「素人の性格認知」は，大人の性格認知はかつての「対人認知」研究，子どもの性格認知は「心の理論」研究において検討されている（子どもを対象とした対人認知研究も行われているが，圧倒的にその数は少ない)。

まずは，素人がどのように性格認知を行っているかをスケッチしよう。架空の子ども「あつし君」の物語を例にしてその概要を説明する（林，2002)。「あつし君は朝，幼稚園に行きました。先生と会いました。あつし君は大きな声で『先生，おはようございます』と言いました（場面1)」「あつし君は外に行きました。外にはお友だちが何人もいました。あつし君はそのお友だちとボールで遊びました（場面2)」「今日はお父さんとお母さんに歌を聞いてもらう会がありました。たくさんのお父さん，お母さん，お友だちの前であつし君は歌を歌います。あつし君は大きく手を振りながら，大きな声で歌い，踊りだしました（場面3)」この3場面から構成された物語を聞いて，「あつし君」はどのような性格の子どもだと考えただろうか。

性格認知とは，その対象人物の様々な行動データを参照して，その背後にある性格像を推論する。この推

論過程には「性格の本質」及び「性格の内容」についての理解が前提となる。

「性格の本質」の理解とは，性格が次の3つの要件を満たす構成概念であることを理解することである。3つの要件とは，①性格とは時間を超えてある程度の一貫性を持つもの（通時間的一貫性），②性格とは状況を超えてある程度の一貫性を持つもの（通状況的一貫性），③性格とは行動の内的原因として仮定されるもの（因果性），である。大人は3つの要素を満たす構成概念としての性格を理解しており，子どもでは5～6歳頃から理解が始まるとされている。

「性格の内容」の理解とは，性格にはどのような類型あるいは特性があるかの理解である（性格の記述法としては類型論と特性論があるが，後者の方が容易に性格認知がおこなえることから，以後，特性論的把握に焦点を当てる）。性格を，単純に「良い」性格かあるいは「悪い」性格か，のように一次元的把握を必ずしているわけではない。多くの場合，複数の評価次元を使って性格認知を行っているが，性格の評価次元としてどのような次元（内容）があるかを意識的あるいは無意識的に理解していることが前提となる。評価次元としてはビッグ・ファイブ説に基づく，外向性，協調性，勤勉性，情動性，知性の5つの次元が挙げられる（林，2002；村上・村上，1999；曾我，1999）。

「性格の本質」と「性格の内容」を理解しているならば，「あつし君」物語を読むことによって次の推論をおこなうことができるだろう。「3つの場面は時間的にも状況的にも異なるがある共通した行動を行っている（一貫性）。その行動の発生原因としてあつし君の性格が考えられる（因果性）。その性格とはどのようなものか。外向性，協調性，勤勉性，情動性，知性の次元で考えると，外向性に関する行動と考えられる（性格の内容）。すなわち，あつし君は外向的な性格であろう」と。

心の理論

性格とは心的な属性を持つ構成概念であることから，他者の性格を理解する能力とは，他者の心を理解する能力に含まれる。それでは，人はどのようにして他者の心を理解するのか。この問題は心理学のみならず，心理学の前身である哲学の「心の哲学」(philosophy of mind) 領域で長年議論されてきた。近代哲学の父 Descartes がいっさいの哲学問題を，自我を原理として解こうとした以来，他の自我，すなわち他我の認識の問題がアポリアに陥った。日常の感覚からは，自分に心があるならば他者の心の状態を知るのは簡単だ，と他我問題が成立しないだろう。しかし，自分の心と他者の心は認識コードとして大きな隔たりがある，と哲学者は主張する。相手の心の状態を直接知ることはできないため，唯一観察可能な表出行動を通して推論を行わざるをえない。一方，自分の心の状態を直接知ることはできるが，表出行動を観察することはできない。どうして異なる認識コードを持つにも関わらず，自分と他者の心が接続されうるのか。

他我問題は，心理学においては「心の理論」の形をとって再浮上することなった。「心の理論」研究はチンパンジーなどの知能研究を行っていた動物心理学者 Premack & Woodruff（1978）によって始まったとされるのが通説である（松村，1997）。Premack らは，「登場人物Pが檻に閉じこめられ，ライオンから逃れるために鍵を開けようとしている場面のビデオを第2の登場人物Oが観察しており，Pが無事逃れた写真と不運な結果に終わった写真から1枚をOが選択しようとしている場面」という入れ子構造のビデオを用いた実験を提案した。事前にOがPを嫌っていることを示したおいて上で，「Pがライオンの餌食になっている写真」をOが選んでいる場面の写真を選ぶとしたら，チンパンジーにもOの心が理解でていることになるだろう。結局チンパンジーには限定的な「心の理論」しか持たないと Premack は結論づけることになるのだが，この研究は「心の理論」研究の起爆剤となった。

Premack らの論文の掲載号に掲載された心の哲学者 D. C. Dunnett のコメントは，「心の理論」研究における新しい実験パラダイムを生み出した。Dunnett は「心の理論」を調べるためには，「E（実験者）がバナナの入ったロッカーの鍵を赤い箱に入れて出ていくところをC（チンパンジー）が観察する。次に，P（飼育係）が入ってきた鍵を緑の箱に移すところをCが見る。Eが戻ってきてCに餌をやろうとする。Cは，Eが鍵は赤い箱の中にあると信じていると信じているので，Eが赤い方の箱に行くだろうと予測する」という場面で実験を行うことを提唱した。この実験パラダイムは，Wimmer & Perner（1983）が「誤信念課題」(false-belief task) として採用した。Wimmer & Perner は，マクシという男の子が，不在の時に母親によって移動させられたチョコレートの置き場所としてどこを捜すか，という「誤信念課題」を作成した。主人公マクシの誤信念を，3～4歳児はそのほとんどが正しく理解できなかったが，4～7歳にかけて正解率が上昇するというデータが得られている。

「心の理論」研究は Baron-Cohen, Lesile, & Frith（1985）によって新たな展開を見せることになる。Baron-Cohen らは，自閉症が「心の理論」のモジュー

ルを欠く発達障害であるという仮説に基づき，自閉症児に誤信念課題を実施した。生活年齢11歳11ヶ月の知的能力にあまり障害を受けていない高機能の自閉症児でさえ，誤信念課題の通過率が20%に過ぎないという結果を得て，Baron-Cohen は〈自閉症=「心の理論」欠如〉仮説を提唱する。Baron-Cohen は最近「心を読むシステム」という精密な理論モデルを提案した。このモデルでは，①意図検出器，②視線方向検出器，③共有注意の機構，④心の理論の機構という4つのモジュールを仮定している。そして自閉症児は，①と②のモジュールを発達させることは比較的容易だが，高機能の自閉症児でも③と④の発達障害の程度が大きいと述べる（子安，2000）。

これらの研究が示すように，「心の理論」は現在，様々な領域の研究者が参加し，動物心理学，発達心理学，障害児心理学，そして哲学などの各領域で急速に発展してきている。しかし，急速な発展に伴って，当初考えられていた厳密な意味での「心の理論」ではなく，より漠然とした「心の理解」研究としての意味合いが大きくなってきているように思われる。「心の理論」の用語の使われ方や意味でさえ研究者によって大きく異なっている。幼児は，心に関するまるで科学的理論と類似した理論を持っていると主張する厳密な立場から，単に「心の理解」と同義に使う立場まで混在している。筆者も，厳密な意味での「理論」を想定しておらず，漠然とした心の理解に関する研究を「心の理論」研究と考えている。

様々な立場から「心の理論」が研究されているが，その要約を試みると次のようになるだろう。「人間は欲求，信念，意図，感情などから成り立つ心を持っている。その心は人の行為を説明したり，予測したりする際の認知的枠組みとして機能する」本稿では，以下，このような心の理論の中から，子どもの性格認知に関連するものだけを抜粋，その発達過程のスケッチを行いたいと思う。

同調行動による心の起源

人は，複雑で多種の行動に対して有効な説明や予測を行うために，他者の心を積極的に想定する。行動の原因を心的属性に帰属するためだが，誕生直後の新生児や乳児が，大人同様の，心の理解をしているわけではない。近年の乳児研究法により「有能な新生児」観が確立したことを背景として，誕生時に既に「心の理論」は完成していると主張する者もいるが（例えば，心の理論のモジュール説を提唱する Fodor など），多くの研究者は，「心の理論」に関連する基本能力はある程度持っているが，理解力の増大は発達によるとする立場を取る。

それでは，新生児や乳児はどのような基本能力を持って誕生するのか。重要な能力の一つは，乳児は外界の存在物（人間や事物）の中から，人間に特に関心を向けることができることである。Fantz（1966）は，生後5日以内の新生児と2～6ヶ月児に対して，人間の顔，標的，新聞の切り抜き，色の付いた円などを提示した。各刺激に対する子どもの注視時間を調べたところ，人間の顔に対する注視時間が最も長いことが示されている。また Meltzoff（2002）は，観察された行為と実行された行為との間の等価性の検知能力が，心の理解に関する最重要能力であると主張する。この検知能力は先に挙げた他我問題に対する心理学的な一つの回答であると考えられる。すなわち，幼児の観察した「他者の身体動作」と，幼児自身が直接体感している「自分の身体動作」とが，身体に関するイメージや情報である「身体スキーマ」によって両者は接続される。この身体スキーマと自分の身体動作に伴った心の状態とが結びつくことにより，「心→行動」図式による理解が成立すると考えられる。

このような等価性の検知能力を発揮するためには，乳児は自分と他者の動作を同調する能力が必要となる。最近の乳児研究から，乳児が人に対して反応するように準備されて生まれてくることが明らかとなっている。Martin & Clark（1982）によると，生後10数ヶ月の新生児は，自分自身の泣き声やチンパンジーの鳴き声よりも，他児の泣き声を聞かされたときによく泣いていた。また，新生児が舌を出したり口を大きく開けたりする大人の顔を見て，新生児自身も同様の顔の動きを模倣することが報告されている（Meltzoff & Morre, 1983）。

Meltzoff（2002）は多くの研究で，模倣が社会的認知の発達にどのような役割を果たすかを調べた。同調行動が，新生児が目で見た他者の位置と動きを，自分の身体の位置と動きへと対応づけ，心の理解に欠かせぬ身体スキーマを精緻化することは，既に指摘した。その他にも，同調行動には重要な役割があると Meltzoff は主張する。Meltzoff & Moore（1992）は，生後6週の新生児に，最初母親が口を開くジェスチャーをするのを見せ，母親が退出後，別の全く見知らぬ人が舌を出すなどの，異なる人物が異なるジェスチャーをする場面を観察させた。新生児は，2人が入れ替わった場面を確認しているときには，それぞれのジェスチャーをそれぞれの人物に対して適切に模倣した動作を返すことができた。しかし，秘密裏に交代させた場合興味深いまちがいを起こした。すなわち，見知らぬ人をじっ

と見つめ，動きを止め，そして次に母親のジェスチャーを返したのである。Meltzoff はこの興味深い新生児の間違いを，ジェスチャーの返報により，その動作主であるかを判別しようとしたのではないか，と解釈した。この研究から，乳児は同調行動の返報により人間の同一性を確認しており，多くの模倣が人の同一性の確認経験を導くことを示唆している。

精緻な同調行動をするためには，表面的に他者の動作を模倣するだけでなく，その意図を理解する必要があるだろう。Meltzoff (2002) は12ヶ月児，14ヶ月児，16ヶ月児を対象にして，乳児の意図性の理解を調べた。乳児の目の前で，言語的，情動的手掛かりを与えないように指示された大人が黙ったまま頭を動かした。実験操作として，目を開けたまま目標方向に頭を動かす大人を観察する群と，目を閉じたまま頭を動かす大人を観察する群を設定した。大人は，他者が自分とは異なる方向に視線を向けていると，他者が何かに対して関心を持っている，何からの意図性を持っていると知覚する。乳児も大人同様に他者の意図性を理解していることが分かった。すなわち頭を対象方向に動かしていても，目を閉じていた大人よりも，目を開けている大人を長く意味ある行動として観察していた。このように，同調行動により，他者の意図性の解読が促進されることが示唆された。

心を理解するには，特定対象者に関心を向け，その人物がどのような意図を持っており，その意図がどのように表出されているか，の理解を前提とする。同調行動はこれらの前提を導く。

情動の理解を通して

Wellman (1990) は「信念－願望」の推論を中心とした心の理論を提唱した。この理論によると，行動に影響を与える心的属性の中で2歳頃から最も早く理解されるのは「願望」である。そして願望を引き起こす要因として基本的情動を指摘している。すなわち心の理論は，情動理解から本格的に始まると考えられる。

進化論を提唱した Darwin は情動に関連した2つの仮説を主張した。「赤ん坊は生得的に基本的な情動表出の意味を認知する能力を持つ」，もう一つの仮説は「基本的な情動とは，様々な文化を通して普遍的である」という説である。Darwin の進化論の流れを汲む Ekman は，情動は生活体が生存する上で，必要に応じて適応価の高いものが進化し，遺伝的に組み込まれてきた，と仮定し，一連の研究で基本的情動の存在を実証した（例えば，Ekman & Friesen, 1971)。彼は，基本的な情動として，恐れ (fear)，驚き (surprise)，怒り (anger)，嫌悪 (disugust)，悲しみ (sad)，喜び (happy) を挙げた。これらの基本情動にはその情動特有の表情が存在するとして，世界の様々な民族（非西洋圏含む）に提示し，基本的情動の普遍性を確認したと主張した（濱・鈴木・濱，2001)。

Haviland & Lelwica (1987) は，普遍的な基本的情動に対する生後10週の新生児の情動認知を研究した。母親が示す幸福，怒り，悲しみに対して，新生児は異なる反応を示した。幸福の表情に対しては喜びの表情を示し，怒りの表情に対しては怒りを示したり，そして悲しみに対しては口をもぐもぐさせたり，噛んだり，吸ったりする動きが増えていく様子が観察された。この結果は，母親の情動表出に対して，乳児が模倣だけではなく，選択的，かつ，適切な反応をすることを示唆している。

乳児は，養育者との情動的な結びつきの経験を重ねることにより情動の理解が進んでいくが，生後1歳後半から2歳頃になると，情動理解にとって重要な転機を迎える。人を慰めたり，からかったり，怒らせたりといった対情動的対処行動を行うようになる。この行動は，自らの反応行動が他者の情動に影響を与えることを理解しはじめていることを示唆している。それまでは他者の情動に受動的に対処していたのに対して，2歳頃から他者の情動を積極的に変化させようといった行動を起こすようになる。Dunn, Kendrick, & MacNamee (1981) は，2～4歳児の子どもが，年下のきょうだいと遊んでいるときに，きょうだいに対して混乱をさせたり，慰める行動をとっていることを報告した。逆に，2～3歳児が弟や妹に対して，叩いたり，つついたりなどの行動をとることで計画的に行い相手を不機嫌にさせたりもする (Dunn & Munn, 1985)。

相手の情動を操作するにはどのような能力が前提となるのか。まず，他者の情動表出の識別でき，そして情動の意味や原因を分析することができることが前提となる。さらには，そのような情動，及びセットとなる願望を操作することで行動は変化するという「願望（心）→行動」の理解（心の因果性）も必要となるだろう。

情動理解の経験は因果性の理解の促進とともに，評価能力も促進する。幼児は情動変化のために，慰めるあるいは他者の機嫌を損ねるなどの行為を行うが，この頃から「良い」「悪い」の評価語を使うことで，慰める行為には「良い」，傷つける行為は「悪い」という評価が3歳児までにできようになる (Smetana, 1981)。行動に対する評価次元を学習して，この評価次元が後に性格の評価次元へと変化していく。

性格の本質の理解

性格は，一貫性（時間的，及び状況的）と因果性の要素を持つ構成概念であるという性格の本質を，子どもが理解しているかどうかを調べた研究は Heller & Berndt（1981）に端を発する。5歳児，8歳児，11歳児を対象として，特定場面の登場人物の行動が性格に基づいて，異なる場面での行動にも般化していることを理解しているかを検討した。具体的には，子どもに2つの場面で利己的あるいは寛大に行動したある主人公の短い話を聞かせた。次に，子どもに最初に与えられた行動と類似している場面から，異なっている場面までのその主人公の行動を予測させる。そしてその主人公についての多様な特性を評定させた。その後の性格特性理解研究で普及する「行動予測パラダイム」が使われている。結果，5歳児は過去に寛大な行為をした人物は，利己的な人物よりも，将来において寛大な行為をするだろうと予測し，利己的な人物についても適切な予測を行った。この研究は，年少児であってもある程度の一貫性と因果性を理解していることを示している。しかし過去の行為とは異なる状況での行動について適切な予測ができたのは8歳以上であり，年少児は「良い」性格の人はそうでない人よりも将来何か良いことをしそうである，というやや一般的な意味においての理解であった。

多くの研究が，幼児にも一般化能力があることを認めているが，どの程度の一般化が可能であるかについては疑問がある。Rholes & Ruble（1984）は5～7歳児を対象に行動予測パラダイムに基づく実験を行った。一貫性には，時間的一貫性と状況的一貫性があるが，Rholes & Ruble は幼児は時間的一貫性は理解しているが，状況的一貫性については理解しておらず，幼児は状況が異なる（当然時間も異なっているが）と適切な行動予測がおこなえないと報告した。

これらの研究結果が示すとおり，結局，幼児は時間や状況が異なる場面を超えて一貫性を理解しているかどうか，について異なる結論が出されている。この混乱に対して清水（2000）は「動機」（Wellman の「願望」に相当）の媒介変数を導入することで解決を試みようとした。先行研究は特性と行動の関係のみに注目しており，特性→行動の因果関係の理解を検討している。しかし向社会的行動特性を持つ者は向社会的動機を持つから，向社会的行動を引き起こすだろうといった，動機を媒介とした，特性→動機→行動の因果関係の図式を検討しないと，性格特性を理解したことにはならないと指摘する。3～6歳児を対象とした研究の結果，特性・動機・行動の因果関係は3～4歳児から理解し始めてるいるが，5歳児から確実に理解できるようになることが示唆された。また性格特性が一貫した行動の原因であることの理解は，5歳児から理解が始まるが，6歳児からより複雑な場面においても理解ができることも示唆された。

性格の内容の理解

他者を認知する際には，我々大人も，心的属性だけでなく，外面に現れる物理的属性の情報を使っている。Piaget が指摘するように，前操作期の幼児は外面的情報に引きずられる傾向を持つ。子どもは他者を認知する際にどのように記述するのだろうか。

Livesley & Bromley（1973）は320名の7～15歳児を対象にした研究を行った。参加児に対して，「あなたはどんな人ですか」の記述をさせ，次に「嫌いな女の子」「嫌いな男の子」「嫌いな女性」「嫌いな男性」「好きな女の子」「好きな男の子」「好きな女性」「好きな男性」の記述を書かせた。記述文を，特性・習慣的行動・動機・態度などの「中心的記述」と，容姿・活動・出来事・持ち物・客観的情報・好み・社会的役割などの「周辺的記述」とに分類した結果，年齢とともに前者は増加し，後者は減少していることが報告された。性格に関する記述は，8歳以下の子どもは約4％であったのに対し，9～15歳と年齢が上がるにつれ10～15％へと増加した。

この研究では性格特性用語の「自発的使用」に焦点を当てている。年少児では性格特性用語をあまり自発的に使用していないことになるが，だからといって，性格特性用語を全く知らないと判断してよいのだろうか。Ridgeway, Waters, & Kuczaj（1985）は18ヶ月～6歳までの子どもの語彙を調べた。子どもの親に，子どもが125の形容詞リストの単語をいつ頃理解・使用できたかの年齢を報告させた。2歳では「役に立つ」「愛する」，3歳では「親切な」「意地悪な」「優しい」「怠けている」「内気な」，6歳では「残酷な」「強情な」「思いやりのある」「神経質な」などの性格特性に関連する用語を年少であっても理解していることが判明した。

何故，年少児は性格特性用語を理解しているにもかかわらず，自発的に使用しないのだろうか。Craig & Boyle（1979）は，子どもも促されれば性格特性用語を多く使うことができることを明らかにした。5～10歳児に，ある登場人物について記述するように求め，強制選択の性格特性についての質問（例えば，彼女は内気か，彼女は親切か）を持ち出し，性格特性の使用を促進させた。結果は7歳児もすべての記述の45％が

性格特性用語を含むようになっていた。このように自発的な対人記述研究では，子ども達は性格特性用語に関する語彙を多く持っており，促されればそれらを使うことはできるが，自発的使用については8歳頃まで待たなければならない，という一貫した結果を示している。

Livesley & Bromley や Ridgeway らの研究は子どもの語彙を調べたものである。しかし，この方法論では子どもの言語能力に大きく制限を受けてしまうという問題点がある。対照的に，極力言語能力を必要としない方法として，Heller & Berndt の研究で採用された行動予測パラダイム（特定人物の物語を提示し，その人物性格をラベリング，行動を予測させる）によって，子どもの理解する性格特性の内容を調べる研究も行われている。Yuill (1992) は，性格特性用語を「寛大」「親切」「援助的」などの社会的意図を示す用語と，「勇敢」「悲観的」「不安」などの内的状態を示す用語の2種類に分類した。社会的意図の用語とは，社会的動機づけに原則的に帰せられるとともに，他者に対する指向的な行為に関係があり，一般には道徳的価値を持っている。一方，内的状態を示す用語は，行為者によって経験される内的な心的状態（信念－期待など）にまず帰せられ，肯定的否定的の両方の価値がある。Yuill は前者が後者よりも早く理解されていることを報告した。

このような行動予測パラダイムによる子どもが理解している「性格の内容」の検討は，その研究数が少ない。少数の研究の中から筆者の研究（林，2002，2003）を紹介する。情動理解の経験を重ねることで，「良い－悪い」の一次元的評価次元が獲得される。この「良い－悪い」の評価は他者の性格を理解する上でも有効であり，実際，幼児は人の性格を評価するためにこの評価語を多用している（Smetana, 1985）。この全般的な評価次元を出発点として，性格特性概念が理解され始める児童期を対象として，どのような内容の性格を理解しているかどうかを調べている。

何故情動に関連した評価語が性格の評価語に結びつくのか。濱・鈴木・濱（2001）は，情動と性格との関連が時間を基礎にした持続性の観点で関連があると述べる。感情に関する現象を記述する用語として，情動（emotion），感情（feeling, affection），気分（mood），性格特性（peronality trait）がある。「情動」は，ある刺激や要求の変化によって一過性の急激な表出や自律反応系の変化を伴って生じる現象で，秒ないしは分の単位での現象である。「感情」という用語は，広義には「情動」「気分」「情操」を含む包括的な用語であるが，狭義には，「快－不快」を両極とし，さまざまな中間層を持つ状態と定義される。このような狭義の意味での感情は数時間あるいは日の単位の現象であると考えられる。「気分」は，明るい気分，暗い気分というように，数日から数週間の単位で持続する，弱い感情であると考えることができ，性格や気質との関係が強い。さらにこうした傾向が数ヶ月や数年というように長い経過で持続する場合，それは「性格（特性）」と呼ばれる。

このように情動と性格には関連が見られることから，情動の評価語が性格の評価語へと般化すると考えられる。実際，初期の性格評定では「良い－悪い」次元が使われているが，情動の評価次元の影響を受けたものだろう。

さて一般的な「良い－悪い」評価次元は幼稚園年長児で頻繁に使用されているが，児童期に入ると性格評定次元が分化していく。外向性，愛着性（協調性），統制性（勤勉性），非情動性（情動性の対概念），知性の5つの特性がどのような順番で理解されているかを調べた林（2003）の研究によると，①外向性，②愛着性，③知性，④統制性，⑤非情動性の順に理解が行われることが分かった。性格検査の標準化研究を行った曾我（1999）や，児童の自由記述文を調べた Donahue（1994）によっても，児童後期では，五つの認知次元全てを理解していることが報告されている。これらの研究をまとめると，性格の内容の理解の発達は児童期に行われていると言えよう。

本稿は「心の理論」研究から，性格理解に関する発達過程のスケッチの概要を行った。性格理解は，(1)同調行動による社会的認知の基礎が築かれ，(2)情動理解による心の行動に対する因果性の理解の促進，及び，性格理解に通じる行動の評価次元を獲得し，(3)性格の一貫性とビッグ・ファイブに基づく性格の認知次元を理解する，といった3つの段階を経て成立する。

【引用文献】

Baron-Cohen, S., Lesile, A., & Frith, U. 1985 Does the authistic child have a "theory of mind"? *Cognition*, **21**, 37-46.

Craig, G., & Boyle, M. E. 1989 The recognition and spontaneous use of psychological descriptions by young children. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 207-208.

Donahue, E. M. 1994 Do children use the Big Five, too? Content and structual form in personality description. *Journal of Personality*, **62**, 45-66.

Dunn, J., Kendrick, C., & MacNamee, R. 1981 The reaction of firstborn children to the birth of a sibling: Mother's reports. *Journal of Children Psychology and Psychiatry*, **22**, 1-18.

Dunn, J., & Munn, P. 1985 Becoming a family member: Family conflict and the development of social understanding in the first year. *Child Development*, **50**, 306-318.

Ekman, P., & Friesen, W. V. 1971 Constrants across culture in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 288-298.

Fantzs, R. L. 1966 Pattern, discrimination and selective attention as determinats of perceptual development from birth. In A. H. Kidd & H. L. Rivoire (Eds.) *Perceptual development in children*. New York: International University Press. Inc. 143-173. (堂野恵子・加知ひろ子・中川伸子（編） 1989 保育のための個性化と社会化の発達心理学 北大路書房による)

濱 治世・鈴木直人・濱 保久 2001 感情心理学への招待－感情・情緒へのアプローチ－ サイエンス社.

Haviland, J. M., & Lelwica, M. 1987 The induced affect response: 10-week-old infants' responses to three emotion expressions. *Developmental Psychology*, **23**, 97-104.

林 智幸 2002 幼児の行動予測における性格特性概念 広島大学大学院教育学研究科修士論文。

林 智幸 2003 児童におけるポジティブな性格特性概念の理解 日本心理学会第67回大会発表。

Heller, K. A., & Berndt, T. J. 1981 Developmental changes in the formation and organization of personality attributions. *Child Development*, **52**, 623-691.

子安増生 2000 心の理論 心を読む心の科学 岩波書店。

Livesley, W. J., & Bromley, D. B. 1973 *Person Perception in Childhood and Adolescence*. London: Wiley.

Martin, G. B., & Clark III, R. D. 1982 Distress crying in neonates: Species and peer specificity. *Developmental Psychology*, **18**, 3-9.

松村 暢隆 1997 幼児・児童の〈表象的心の理論〉の発達 心理学評論, **40**, 110-120.

Meltzoff, A. N., & Moore, M. K. 1983 Newborn infants imitate adult facial gesture. *Child Development*, **54**, 702-709.

Meltzoff, A. N., & Moore, M. K. 1992 Early imitation within a functional framework: The importance of person identity, movement, and development. *Infant Behaviour and Development*, **15**, 479-505.

Meltzoff, A. N. 2002 Chaper 1 Imitation as a Mechanism of social Cognition: Origins of Empathy, Theory of Mind, and the Representation of Action. In Goswami, U. (Ed.) *Blackwell Handbook of Childhood Cognitive Development* (pp.1-25). TJ International, Padstow, Cornwall, UK: Blackwell Publisher Ltd.

村上宣寛・村上千恵子 1999 性格は五次元だった－性格心理学入門－ 培風館。

Premack, D., & Woodruff, G. 1978 Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioural and Brain Science*, **1**, 515-526.

Ridgeway, D., Waters, E., & Kuczaj, S. A. 1985 Aquisition of emotion-descriptive language: Receptive and Productive vocaburary norms for ages 18 months to 6 years. *Developmental Psychology*, **21**, 901-908.

Rholes, W. S., & Ruble, D. N. 1984 Children's understanding of dispositional characteristics of others. *Child Development*, **55**, 550-560.

佐藤達哉・渡邉芳之 1990 エスノメソッドとしてのパーソナリティ 日本社会心理学第31回大会発表論文集, 222-223.

清水由紀 2000 幼児における特性推論の発達－特性・動機・行動の因果関係の理解－. 教育心理学研究, **48**, 255-266.

Smetana, J. G. 1981 Preschool children's conception of moral and social rules, *Child Development*, **52**, 1333-1336.

Smetana, J. G. 1985 Children's impressions of moral and conventional transgressors. *Developmental Psychology*, **21**, 715-724.

曽我祥子 1999 小学生用5因子性格検査（FFPC）の標準化, 心理学研究, **70**, 346-351.

Wimmer, H., & Perner, J. 1983 Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding deception. *Cognition*, **13**, 103-128.

Wellman, H. M. 1990 The Child's Theory of Mind. Cambridge, MA: MIT Press.

Yuill, N. 1992 Children's production and comprehension of trait terms. *British Journal of Developmental Psychology*, **10**, 131-142.

（主任指導教官 湯澤正通）